

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「場所」創出の重層性：  
沖縄久米島における御嶽再生活動をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5591">http://hdl.handle.net/10502/5591</a>

〔論文〕

## 「場所」創出の重層性

— 沖縄久米島における御嶽再生活動をめぐる —

河 合 洋 尚

### 1. はじめに

沖縄県久米島では、ここ10年程の間、伝統的な宗教祭祀の場である御嶽（ウタキ）を再生<sup>(1)</sup>しようとする動きがある。この活動は目下のところ3箇所で行われており、主に御嶽の内部にある拝所の再建活動を通して、地域住民の御嶽への感覚は確実に変化している。本稿の目的は、このような特定の場所に対する人間の諸感覚を重視する今日的な理論枠組み——場所論（place theory）の批判的検討を通して、久米島における御嶽再生活動の実態を明らかにすることである。

場所（place）は、筆者の専攻する社会・文化人類学において、近年強い関心を集めるようになった概念の一つである<sup>(2)</sup>。クリフォード・ギアツ等が指摘しているように、それは単なる「物理的な背景」もしくは「社会的行為の舞台」としか考えられておらず、長らく議論の対象となることもなかった [Geertz 1996 : 159 ; cf. Rodman 1992 : 640]。しかし1980年代に入ると、地理学やカルチュラル・スタディーズなどの他分野の影響を受けるようになり、むしろ場所は、人間の諸感覚、具体的には、イメージやアイデンティティ、歴史意識などが埋め込まれる場であることが認識されるようになった [Auge 1992 ; オジェ 2002 ; 244-245]。そして人類学者たちは、このような「場所」（以下、イメージやアイデンティティなどの諸感覚が埋め込まれている意味での場所を、括弧つきで記す）が、近代的状況<sup>(3)</sup>のなかで、どのようにして創出されているのかという議論——「場所」論に注目するようになったのである。

これまで「場所」をめぐる人類学的議論は、新マルクス主義的なアプローチ

を出発点として展開されてきた。これは、ナショナリズムや観光化に代表されるような近現代な条件（下部構造）が、場所に対する人間の諸感覚を捏造してきたとする論であり<sup>(4)</sup>、他領域一特に地理学と都市社会学一の影響を強く受けて成立した [cf. ハーヴェイ 1999；アーリー 2003]。たとえば、観光を例にとると、近代国家や企業は観光の利益を生み出すために場所のステレオ・タイプのイメージ（表象）を創りだすが、それだけではなく、地域住民の場所に対する諸感覚すらも変えてしまうことがあるというのだ [Linnekin 1983；McDonogh 1991；Rutheiser 1997, etc.]<sup>(5)</sup>。しかし、このような議論は十分に納得できる点を含んでいるものの、各地の「場所」が大局的な政治・経済的条件からのみ創られると考えることは、却って地域住民の「場所」をめぐる諸感覚を画一化し、彼らの多様な声を封じ込めることにつながる。

ここからマーガレット・ロドマンは、一方では大局的な政治・経済的条件に配慮しながらも、他方では「場所」が、地域住民の多様なエージェンシーから創出されていく側面に目を向けていく必要があると主張した [Rodman 1992：645-646]。すなわち、場所に対する感覚は、個々人の立場や経験によって様々なのであるから、各々の表象関係やポリティクスによって「場所」が創出されていく姿を見なければならぬというのである。1990年代中葉以降の「場所」をめぐる議論の多くは、このように民族・階級・年齢・ジェンダー・地域などに基づく経験や立場の違いに注視し、それが対立などの関係性を通して「われわれの場所」を創出していく様相を説明するものとなっている [Bahloul 1992；Dominy 1995；Stoller 1996；Low 2001；Rodman 2001；Hoffman 2002, etc.]。

筆者が2003年7月に調査した久米島・字Zの御嶽もまた<sup>(6)</sup>、今まで述べてきたような「場所」論を通してみると、理解が容易になる側面がある。つまり、次節以降に詳述するが、字Zにおける「場所」としての御嶽の創出は、観光化や「村おこし」運動のような政治・経済的条件に間接的であれ影響を受けている一方で、様々な感覚のすれ違いや、場合によっては主に年齢に基づく対立関係とも関わっているのである。ただし、これら従来の理論的視座は、村内で歴史的に培われてきた「場所」への諸感覚、並びに知識の依存性 [渡邊 1990]

を考慮していない点において、少なくとも久米島の御嶽再生をめぐる事例を考察する際には不十分さが残ることもまた否めない。

本稿ではさしあたり、ロドマン以降の理論的見解に従いつつ御嶽再生の活動を概観していくことから始めるが、第2節で地域概況を述べ、第3節で立場や経験の違いから御嶽再生活動の諸相を概観した後、第4節にてそれらの理論的見解に批評を加えつつ、御嶽再生の活動を考察することにする。さらに、最後の第5節で、要約と今後の課題をまとめることにしたい。

## II. 地域概況

御嶽再生の活動を見る前に、久米島の地域概況について、御嶽、並びにそれと密接に関わる宗教祭祀を中心に述べておく。

久米島は、沖縄県那覇市の西方約100kmの地点にある県下第5位の面積をもつ島である。総面積は63.21km<sup>2</sup>で、面積の大部分を占める本島の他、奥武（オウ）島、オーハ島、硫黄島から構成されている【図1参照】。

久米島は、およそ400年近くにわたり、西の具志川村と東の仲里村に分かれてきた。両村が合併し、久米島町と改名したのは、2002年4月のことである。筆者が調査を行った字Zは旧仲里村に属しており、そのなかでは比較的規模が大きい字である。久米島全体の人口は約9700人であるが<sup>(7)</sup>、字Zの人口はその1割近くにもなる（全字数は2004年現在で31ある）。また、久米島は全体的に移動性が高く、久米島以外の日本国内、もしくは南米など海外で生活してきた経験をもつ者が少なくないのも特徴である。それゆえ、「郷友会」という地域出身者の組織は字ごとに成立している。字Zの場合は、那覇にあるそれが最大となっている。

久米島は、かつて米作りで有名な島であり、部落時代 [cf. 仲原 1982] には水稻栽培に適した立地条件の良い

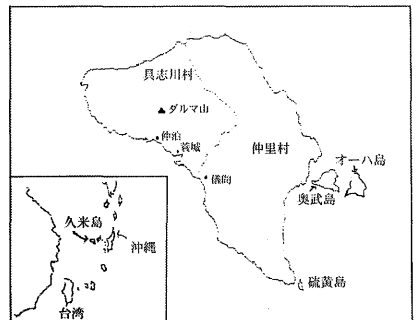


図1 久米島略図

ところに部落を形成し、生活を営んでいた。祭政一致の体制が敷かれたものこの頃で、1400年代までには御嶽（通常は森に囲まれている。久米島の場合、その内部に拝所が存在する）がつくられ、神事が行われていたという〔具志川村村史編纂委員会 1976：27-31〕。

その体制が大きく変化したのが16世紀前葉、尚真王により久米島が琉球王朝の中央集権下に置かれたときである。琉球王朝は、国王のオナリ神である聞得大君（キコエノオオキミ）を頂点に、その下に高級神女を、さらにその下に祝女（ノロ）を置くピラミッド型の宗教制度を確立し、久米島には「君南風」（チンペー）と呼ばれる高級神女1名と祝女10名とが任命された。字Zでも祝女が任命されており、御嶽にて国家祭祀が行われていた〔宮平 1969：30〕。

他方で、琉球王朝は、中国との交易を盛んに行い、久米島はその中継地としての役目を果たしてきた。陰暦の暦や風水（「フンシ」と呼ばれる）が久米島に流入するようになり〔河合 2002：52〕、それは祭祀のあり方にも少なからず影響を与えてきた。

このような御嶽での国家祭祀は、明治初頭の廃藩置県に伴って制度的には廃されることとなり、国家祭祀、さらには御嶽は衰退の途を辿った。他方で、明治以降は、近代化の波が浸透し、学校、警察署、郵便局などの公的機関の設置に加え、土地の私有化が推し進められた。さらに、第二次世界大戦後のアメリカ統治の時代に入ると、電灯の使用（1952年）、久米島電力会社の設立（1956年）、テレビの開局（1963年）、空港の拡張工事（1968年）、兼城港の整備（1968年）などが行われ、交通・通信の便は格段に良くなった。

現在では、観光化の波に伴い、多くの観光客が久米島を訪れるようになっている。ただし、1992年には9万人を超える観光客を受け入れていたものの、その後は数が減少し、新たな観光資源の掘り起こしをすることが、ここ10年余りの課題となっている<sup>(8)</sup>。

### Ⅲ. 御嶽再生活動の実態

#### 1 政治・経済的背景 —観光化政策を中心として—

さて、久米島における御嶽再生活動の事例に移りたい。先述のように、久米

島において御嶽は、国家祭祀の衰退とともに地域住民からは重要と見なされなくなる傾向が強まり、多くは廃棄されるか、もしくは一部の者によって使用されるに過ぎないものになっていた。また、もともと御嶽は女性のための領域であったが、男性が何らかの形で関わるようになるなど、かつての規則も薄らいでいったようである。沖縄学の泰斗である外間守善は、25年ほど前の久米島調査を回顧して次のように述べている。

祭祀や聖域は、一昔前までは厳格な禁忌をともなって何百年来の姿そのままに伝えられてきた。それが崩れはじめた契機は、やはり明治期における沖縄の近代化とそれに続く太平洋戦争という大きな社会変動であったようだ。そしてそれを決定的なものにしたものは、復帰後の経済開発である。事実、わたしたちは今回の調査行で、御嶽も水田跡もひとしなみに、耕地整備事業の進捗につれて巨大なパワーショベルで地ならしされていくのを目の当たりにして、これが最後の機会であったことを実感している [外間 2002: 284]。

だが、ここ10年余りの御嶽をめぐる状況は、一変している。冒頭で述べたように、最近の久米島では御嶽を再生しようとする活動が3箇所で顕著になっており、さらに他の字でも同様の活動の兆しがみられるのである。

このような御嶽をめぐる状況の変化の有力な一因は、ここ30年もの間、久米島が実施している観光化政策であると考えられる。字Zの御嶽（仮に「御嶽X」としておこう）を再生しようとする活動は、後に述べるように沖縄県政府や久米島の村役場が主導して行っていたわけではないが、少なくとも観光化は、その島の変化の動向を知るうえで無視することのできない要因である。

久米島では、早くも1970年代後半以降には観光化の波が到来しており、1981年には沖縄観光が全般的に低迷するなか、8.9%の伸び率をみせていた。さらに翌年になると、久米島観光協会は、いっそう観光化政策に力を入れるようになり、ポスターやガイドブックの作成、観光講演会、村おこし事業などを通して久米島観光を推進する方針を立てると同時に、ある特定の自然景観を天然記念物に指定し、久米島ひいては沖縄の特徴を残す文化的・伝統的景観を文化財として保存する方針を立てた。後者には、赤瓦の住宅の他に、御嶽林も含まれている [久米島新聞 1982: 9]。

久米島の観光化政策は、合併が決定された1997年まで具志川村と仲里村とで別々に推進されたが、両村とも以下の4つの方針に重きを置いていた<sup>(9)</sup>。

- ① 地域振興と関連した形で、観光開発を推進すること。
- ② 観光地となる「歴史的たたずまい」を整備・保存すること。
- ③ 観光資源の掘り起こしによる魅力づくりを促進すること。
- ④ 村民の協力体制を仰ぐこと。

とりわけ仲里村の方は、上記の方針を現実化することに積極的であった。このようにして掘り起こされた文化的・歴史的な景観は、観光パンフレットなどに掲載され、久米島ひいては沖縄の代表的なイメージ（表象）として宣伝された。例えば、2003年7月の調査時に村役場の観光課で配布されていた観光パンフレットには、久米島で珍しい自然景観だけではなく、久米島や沖縄に特有の文化的・伝統的遺産、特に君南風殿内（チンベードゥンチ）、亀甲墓、石敢当、そして御嶽が掲載されていた。

## 2 御嶽再生活動の開始と規模の拡大 — 「非使用者」を中心として—

外間が嘆いていた御嶽の惨状は、御嶽Xにもある程度は当てはまる。この御嶽は琉球王国時代には国家祭祀の場として使われていたが、20世紀の半ばになると、古びた拝所が取り残されるだけになっていった。使用者も、祝女や区長など地域の掟により義務づけられていた者、及び特別「迷信深い」者など一部の者に限られており、多くの字の村民にとっては半ば忘れ去られた存在であったといえる。

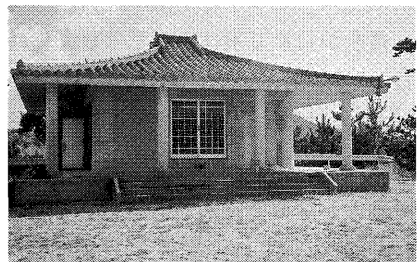
しかし、今から15年ほど前に襲った台風により拝所が飛ばされてしまうと、慣習的にこの御嶽を使用していた一部の比較的高齢の者たち（以下、彼らを「使用者」と呼ぶ）は、規模は小さくとも良いからこれを再建しようと考えた。だが、事態は「使用者」たちにとって思いがけない方向に進むこととなった。字Zの郷友会や当時の仲里村村長等がこの拝所再建の活動に協力し、資金を提供してくれたのだ<sup>(10)</sup>。そして、これは御嶽Xを史跡として保存・再生しようとする動きにつながり、史跡整備事業委員会が、字Zの村民を中心に結成されることとなった。こうして御嶽Xを再生する活動は、御嶽に必ずしも頻繁には

接触していなかった者の協力を得て拡大し（史跡整備事業委員会の成員は39名いたが、彼らの全てが「使用者」だったわけではない）、結果として予想を遥かに上回る多額の資金が集まることとなった。そして、拝所は大規模に再建され、周囲の森は切り開かれてガードレールや空き地が設けられ、さらには入り口には鳥居が、拝所内には賽銭箱が設置されるに至った。今や御嶽は、宗教祭祀の場としてだけでなく、公共の場として、より多くの字の村民に使用されるようになっていく。

さて、日頃から御嶽Xに接することの少なかった「非使用者」たちが、再生活動に与した目的は一体何であったのだろうか。彼らは御嶽再生の活動を通して何を求めていたのであろうか。地元で残されている記録<sup>(1)</sup>には、このことを示唆する事項がいくつか書かれている。そのうち、当時の仲里村長と史跡整備事業委員会会長の声を、一部引用してみよう。

#### 仲里村村長：

字Zの発祥の地であり、歴史的に貴重な場所である「Zの森」〔注：御嶽Xの現地における呼称〕の公園整備を図りながら神屋〔注：拝所の現地における呼称〕建設の事業を実施したことは大変意義深いことであります。一つの集落でこのような多額の資金を造成し、文化的事業として成功したことは後世へ残す大きな財産であります。このことは地域文化の継承や伝統文化の掘り起こしに重要なことであり、他の地域の模範となるものであります。村内に御嶽として保護された地域は多く残されていますが、これらの場所は今でも聖地であり、ある程度の史跡整備と保護がこれからの課題となっています（地名、注釈及び下線部は筆者加筆）。



#### 史跡整備事業委員会会長：

私たちの祖先が字Zの御嶽に祭っ

【写真】再建された拝所。周囲の森は切り開かれている。



た神々を「字の守護神」として、ウマチーなどの行事を通して「五穀豊穡」や「無病息災」、「子孫繁栄」などを祈願し、心の安定と生活の安定を得てきました。そうした神行事も生活文化が多様化していく中ではだんだんと関心が薄くなるのが現状であり…(中略)…ます。これを機会に新しく整備された神屋が多くの方々に利用して頂き、薄れつつある地域文化の継承、そして伝統文化の掘り起こしの一助になっていただければと思います (地名、及び下線部は筆者加筆)。

上記において両者は、ともに伝統文化の掘り起こしを強調しており、さらに史跡整備として御嶽の再生を位置づけている。これは少なくとも文化的遺産として御嶽を保護しようとする政治・経済的脈略の延長上にあるものであると言える。彼らの文面から指摘できることは、意識的にせよ無意識的にせよ、歴史的であるとする史跡を整備し、村民主体の地域振興を図ろうとする先に見た行政の意図と合致しているということである。久米島の政治・経済的条件は、このように御嶽再生の規模を拡大した要因の一つとなっている。

### 3 御嶽再生活動の動機・目的・プロセス

#### (i) 御嶽再生の動機と目的 — 「使用者」の観点より—

御嶽再生の活動は、以上のように、史跡整備事業として当初よりも大規模に行われることになったが、このような状況において「使用者」の御嶽への感覚や取り組みはどのようなものであったのだろうか。

拝所が台風で飛ばされたとき、それを再建しようと初めに行動を起こしたのは、「使用者」の側であった。彼／彼女たちが行動を起こした動機は、御嶽が字の精神的な拠り所であると考えられていたからである。このことについて、数人の「使用者」たちは、次のような説明をしていた。すなわち、字Zにおいて御嶽が字の発祥地であるということは、「先輩」(年配の者に対して言う現地の呼称)たちから聞かされてきた。古くから御嶽の御身体の辺りにある灰は各家庭の竈に分けられてきており、今でも分家をするときは、島外に出掛ける場合でも灰をもたせる。こうして御嶽を中心とする関係性が字の出身者の間には保

たれているのだから、御嶽は字のすべての人間にとって根源であるというのである。そして、この御嶽の意味や愛着は、近年の歪んだ教育や生活の多様化によって特に若者たちには「迷信」とみなされがちであるが、「使用者」たちは「先輩」たちの教えを守り、慣習的な（と彼らが考える）御嶽への感覚を大事にしていきたいと述べる。さらに、若者たちの非行がテレビで報じられる今こそ、御嶽への信仰を強めなければならない時だと主張する者もいた。

このような動機から、「使用者」たちは御嶽の重要な部分である拝所の再建を目的に行動を起こしたのだが、先に見てきたように、外部者の介入により史跡整備事業として大規模にスタートすることとなった。この外部からの介入に対して「使用者」たちは喜んで迎え入れ、事業委員会と協力関係を結んだという。実際に筆者が話を伺った数人は、史跡整備事業委員会に役員として入っている。しかし、「使用者」にとって観光化や史跡整備という行政側の意図は、たいして重要ではなかったようだ。例えばA氏（男性、60代）は、御嶽の再生が観光化や「村おこし」の手段として用いられている可能性を認めつつも、それは重要な問題ではなく、むしろ字の発祥地としての御嶽が整備され、字の人々の心の平安をもたらすことの方が重要なのだと述べていた。

「使用者」たちにとっては、御嶽Xは字の、久米島の、ひいては沖縄の人々の精神的な根源であるという認識が強い。それは、先ほど述べた「先輩」からの教えを遵守するものであると同時に、御嶽は沖縄独特のものであるとする大衆に受け入れられていたイメージ（表象）によっても助長されていたと考えられる<sup>(12)</sup>。

## （ii）御嶽再生活動のプロセス

御嶽再生の活動そのものは史跡整備という現代の政治・経済的脈絡の上であり、「使用者」たちも表面上はそれに則って活動していたかのように見える。しかし、動機だけでなく活動のプロセスにおいても、彼らの目指すところのものは別のところにあったと言える。大部分が60歳以上の高齢者であった「使用者」の関心は、「先輩」たちから伝えられた御嶽への歴史意識や愛着を深めることにあり、さらには御嶽に寄り付かない者（特に若者）に対してそれらを伝える

ことであった。そのために、祖先から伝えられた流儀（「しきたり」と現地では呼んでいる）を遵守するなどの努力が行われており、そのことは活動プロセスの随所に見て取ることができる。

御嶽再生の活動は、字Zの人々を村民とする史跡整備事業として、1992年5

表1 活動の主要な経過内容

年/月/日	活動内容
1992/5/23	区長より委託状の交付
1992/8/28	委員会
1992/12/23	委員会（拝所の設計）
1993/2/29	委員会（趣意書の検討ほか）
1993/6/23	本島郷友会との話し合い
1993/7/5	負担金徴収方法の説明会
1993/8/30	委員会（資金計画、拝所や敷地の構造計画、趣意書の作成ほか）
1994/7/16	郷友会名簿作成に関する話し合い
1994/10/24	拝所建設計画の見直しほか
1994/11/23	事業計画書編纂作業
1995/3/15	郷友会へ募金の協力に関する通知
1995/4/13	字の各戸へ募金の協力に関する通知
1996/7/11	拝所及び敷地の工事の発注
1996/8/6	起工式
1997/10/26	正月行事についての打ち合わせ
1998/5/25	御嶽の環境整備（ガードレール設置）
1998/6/10	鳥居の設置場所の検討
1998/7/5	落成式と祝賀会

月23日より始められた。委員会は1992年8月28日を初めとして幾度となく開かれたが、当初の活動は、残された記録によると、主に資金調達を重点的に行うことにあった。また他方で、拝所再建の設計について会合を開き、着工されるに至る1996年8月6日まで、数次にわたって話し合いがもたれている【活動の主要な経過内容については表1参照】。

再生の内容は大きく、(A) 森を切り開き公共の空間をつくる作業と、(B) 拝所を中心とした建築物を建設する作業とに分けられていたが、いずれの際にも、「先輩」から語り継がれたとする慣習的な御嶽への接し方によって作業を進められるべきと考えられていた。例えば、御嶽の環境整備にあたって森を切り開く際には、地域の歴史や民俗に詳しい者が呼ばれ、森を切り開いていいか神に伺いを立てる儀式を行った。というのも、久米島では、御嶽の森は聖なるものとして扱われており、森を勝手に切り開くことは堅く禁じられていたからである。村民の間では、

もし勝手に森を切り開けば、病気になるかハブに噛まれると信じられており、村民たちは実例を挙げてそれを日常的に話し合うことで、この言説を保持させていた。小牧によれば、御嶽の森の神聖性は、少なくとも琉球王国時代から存在しているものであり、蔡温によって導入された思想であるという [小牧 1976 : 26]。

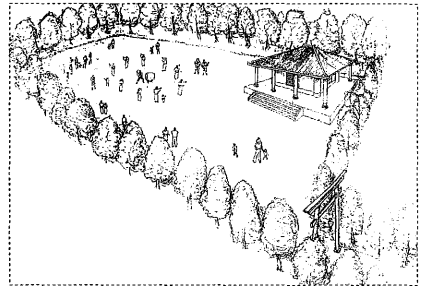


図2 字に残された御嶽Xの設計図

他方で、拜所の配置や方角も、「先輩」から語り継がれた字の歴史的な流儀に従って決められるべきと強調された。まず拜所の配置は、御身体を基軸にするように心掛けられた。つまり、御神体の位置を決して動かさないようにして、再建が行われた。さらに御神体を設置する御台の寸法は、必ず吉寸になるように図られなければならないと考えられ、また方角に関しては、真南を避け、少しずらして建てるのが最良と考えられた。こうした拜所の建て方について、筆者が話を伺った全員が知っていたというわけではないが、「先輩」から教えられた話の断片として説明する者もいた。そして実際には、「しきたり」に従った建設方法を当然知っているものと村民が考える地元の大工に、拜所建築が託された<sup>(13)</sup>。

また、森を切り開く儀式にしても、拜所の建設にしても、御嶽にまつわる大事な行事が行われるときは、必ず旧暦を基準とした日取りが決められたという。このときもまた同様に、具体的な行事のやり方について地域の民俗に詳しい者に委託される。不幸なことに当事者が他界されていたので詳しい話を伺うことはできなかったが、ここに「先輩」から語り継がれた御嶽への感覚や取り組みに従おうとする努力がみられることと、それを達成するために地域の民俗に詳しい古老に知識を依存しているということは強調しておきたい。

以上見てきたように、御嶽再生のプロセスにおいては、「先輩」から伝えられた流儀をできるだけ遵守しようとしている傾向が強い。しかしその反面、活動の後半になると、鳥居や賽銭箱を設置するという、従来の御嶽では考えられ

ない新しい側面も検討・実施されており興味深い。

表1から明らかなように、1997年10月26日には正月行事に関する話し合いが行われ、翌6月10日には「鳥居の設置を検討する」とある。これには、御嶽を初詣の場所にもしようとする委員会の意志が込められている。落成式を迎えたのは1998年7月5日であるが、それ以降、御嶽は行事としては次の4つの使われ方をしている。

- ㉑ 正月（新暦）に行う初詣
- ㉒ 5月（旧暦）に行う稲穂祭
- ㉓ 6月（旧暦）に行う稲大祭（ウマチー）
- ㉔ 8月（旧暦）に行う柴差（シバサン）

仲原が論じたように、このうち㉒～㉔の行事は、かつての久米島における御嶽行事で行われていたものであるが〔仲原 1969：75〕、㉑については見渡す限りの歴史文献では見つけることができない。新しい行事だと見てよいだろう。

なぜ、このような行事が取り入れられるようになったのか。その理由について「使用者」は、初詣という現代の若者にとって分かり易い行事を組み入れることによって、今まで御嶽から遠ざかっていたものを引き寄せるためであると説明する。繰り返し述べるが、活動における「使用者」の第一の目的は、「先輩」から伝えられた御嶽への接し方を継承すると同時に、普段は御嶽に寄り付かない者に関心をもたせることであった。だから、建築物の配置や形態、日程など重要な部位とされる「しきたり」は守りつつ、部分的に重要視されないところを変えていったのである。実際に現在、初詣の時には、より多くの参拝者が年齢を問わず集まるようになってきているという。

このような活動における「しきたり」の強調について、史跡整備事業会の「非使用者」成員がどのようにして関与するようになったのか（あるいは反対勢力があったのか）は記録に残されていないが、少なくとも慣習に基づいて行動しようとする「使用者」たちの意図は、薄れつつある地域文化を、そして御嶽へのアイデンティティや歴史的意識を喚起しようとする事業会の指針と、それほどかけ離れていたものではないことは確かであろう。

#### IV. 考 察

冒頭で述べたように、場所には人間の諸感覚が埋め込まれる。本稿で例として挙げた御嶽は、観光パンフレットなどで久米島ひいては沖縄の代表的なイメージとして表象され、また村落の発祥地として、字の村民の精神的な根源として感じとられている点において、まさにそれを具現化している。

御嶽のような場所に対する諸感覚が近代的状況においてどのように生起しているのかについて、新マルクス主義とそれに続くアプローチは、有効な手立ての1つを示してくれていた。というのも、第1に、御嶽再生の活動は、多かれ少なかれ観光化や「村おこし」のような大局的な政治・経済的状況に左右されており、それは活動の規模を大きくした数人の外部者によって履行されていたからである。たとえ彼らが意識しなくても、結果的にはそうである。また第2に、御嶽への感覚が多様化しているなか、御嶽を使用していた一部の者は、祖先や年配者たちから教えられた御嶽への態度を固持し、近現代的な状況でむしろそれを強めようとしていた。彼らは、時には若者たちの非行ぶりとそれを助長させた近代教育に反感を抱き、むしろ祖先から伝わる心の安定のやり方を強調する。それが人間関係及び精神的根源である御嶽を再生するという行為であり、観光化を進める外部的要因を利用しながらも、それを推し進めた。また、「使用者」自身が御嶽を沖縄的なものと表象する側面もあり、その意味で、最近の「場所」論が唱えるように、「場所」としての御嶽は、ポリティクスや表象として創出される側面を確かに備えているのである。これは、字儀間における御嶽再生の活動にも該当する事柄であるので〔詳しくは本誌別項の深山論文を参照のこと〕、広く久米島にまで拡大して論じることもしばしい。従来の「場所」論は、政治・経済的条件や個々人のポリティクスから御嶽再生の活動を見る視座を与えてくれており、非常に参考になると考える。

しかしながら、御嶽再生の活動とプロセスを具体的に追っていくなかで、字の内部で歴史的に培われてきた御嶽への価値観や諸感覚が重要な位置を占めていることも明らかになった。例えば、「使用者」たちが拝所の再建を決めた動機となったのが、かねてから「先輩」より聞かされていた御嶽への歴史意識、

すなわち、御嶽が村落の発祥地であり、人々の心は御嶽の灰の分配を通してつながっているという語りや実践であった。また森の伐採、拝所の再建においても、字内部の旧来的な「しきたり」に従うべきとされた。さもなければ、病気になったりハブに噛まれたりすると、年配者から伝えられてきたからである。このプロセスにおいて、常に地域の民俗に詳しい者、言い換えれば、祖先や年配者から伝えられた知識を最も保持していると思われる者に託されてきたこともまた、特筆すべき点である。こうした側面は、近代化の結果、道具的に生じたものであるという説明からだけでは十分に把握しきれない。また、単に伝統的な「場所」としての御嶽を捏造する観点からでは、鳥居や賽銭箱の設置のような新しい現象を説明することは難しい。

筆者は、近代化の波が場所に対する人々の諸感覚を多様にしたとし、各々の経験や立場から多様に「場所」が創出される側面を考察する近年の理論的枠組みに賛同すべき点が多いと考える。しかし、彼／彼女たちは一つ重要な点を見落としてきたように思われる。それは、多様性のなかには、祖先や年配者から教えられた地域的な価値観や諸感覚を身体化し、そこから「場所」に接する側面もまたあるということである [cf. Munn 1996; Feld and Basso 1996; 河合 2003, etc.]. 地域で歴史的に培われてきた固定的な価値観や諸感覚からのみ「場所」を論じることはできないが、かといって、それを無視することもできない。特に、本稿で論じたような村落社会ではそうである [cf. Gray 1999].

御嶽再生の活動から明らかにされたのは、御嶽Xが、史跡整備などの形でつくられつつも、そのプロセスにおいて、地域で歴史的に培われてきた諸感覚や知識の依存関係が強調されているという点であった。つまり、たとえ「場所」が近現代的な脈略によって創出されようとも、水面下では別の力学が働いている。御嶽再生の活動を考察する際には、少なくともこうした重層的な「場所」創出の側面からアプローチされなければならないのである。

## V. 結 語 —要約と展望—

本稿の目的は、ここ10年ほどの間に久米島で起きている御嶽再生の動きを、

「場所」という観点から検討することであった。まずは新マルクス主義とそれに続く議論を適用することで、御嶽という「場所」が近現代の政治－経済的条件から創出される側面を、御嶽をめぐる局地的な事例から見ることができた。しかし、御嶽再生の活動のプロセスを追っていくと、このような従来の理論からでは捉えきれない側面を垣間見ることができる。少なくとも慣習的に御嶽を使用していた者にとっては、御嶽への諸感覚や取り組みは、祖先や年配者の教えに従い、さらに近現代的状況を利用してそれを拡大するものであったからである。ここから、1つの「場所」を創出する際には、近代化の政治・経済的条件か、もしくは地域に固定的な慣習的側面かという二者択一的な解釈ではなく、双方の重なり合い（重層性）からの解釈こそが必要だと結論できる。

後者を仮に「『場所』創出の重層性」と呼ぶことにして、これは少なくとも久米島における御嶽再生活動を考察するときには、有効なアプローチとなるのではないかと予測できる。というのも、深山直子が本誌別稿で述べ、筆者も部分的に調査した字儀間における御嶽再生の事例は、字乙のそれとかなり多くの類似点が存在するからである<sup>(14)</sup>。ただし、「『場所』創出の重層性」の視点が他の村落社会に適用しうるか否かは、まだ検討の余地がある。特に、それを都市社会において適用するならば、なおさらのことであろう。この点は、今後の課題としたい。

また、新マルクス主義以降の「場所」論は、近代化以前と近代化以降を極端に区分しているが、久米島における拝所再建の事例を見てみると、このような区分が果たして妥当なのだろうかという疑問も湧いてくる。というのも、祖先や年配者から伝えられたもの、つまり現地で「しきたり」と呼ばれている要素のいくつかは、琉球王朝時代にも見受けられたものであるからだ。例えば、御嶽再生の内容は、(A) 森を切り開き公共の空間をつくる作業と、(B) 拝所を中心とした建築物を建設する作業が主であったが、前者は、既に述べたように蔡温によって導入された思考である。さらに後者は、明らかに「フンシ」（風水）と関わるものであるが、これも琉球王朝時代に伝えられたものである〔河合 2002〕。このような「場所」の連続性を歴史文献から解明するのが、「場所」論をめぐる、もう一つの課題である。



## 【注】

- (1) 『広辞苑』によると、「再生」という語には、①失われたものを再び蘇らせること、②以前に経験した事象を再び思い起こすこと、の2つ意味がある。本稿では、「再生」を双方の意味で使っている。元通りに復元するという意味では用いていない。
- (2) 人類学において「場所」をめぐる議論は、1980年代に高揚した。初めて人類学で「場所」が大きく取り上げられたのは、1986年12月のアメリカ人類学会（American Anthropological Association）において、「場所と声」と題されたシンポジウムが開催されたときである [Appadurai 1988: 16]。それ以降、『文化人類学』誌（1988年、1992年）に特集が組まれた他、「場所」をメインとする研究グループがアメリカにていくつか結成された。現在、欧米諸国では「場所」は人類学の中心的なテーマの一つとなっている。ここ数年、日本の人類学界でも「場所」の議論は注目されるようになってきているが、まだ系統的に論じられるには至っていない。
- (3) 本論で言う「近代状況」とは、片仮名で「モダニティ」及び「ポストモダニティ」と呼ばれるものに相当する。「モダニティ」と「ポストモダニティ」を対立項として区別する見解もあるが、本稿では「ポストモダニティ」を「モダニティ」の延長とするハーヴェイやオジェの見解 [ハーヴェイ 1999:157-164; Auge 1992] を受け、両者を区別することはしない。
- (4) こうした見解はしばしば、近代国家や有力企業が、自らの利潤を得るために人々の日常性を操作するという、レギュレーション理論 [ハーヴェイ 1999: 167-243; リピエッツ 2002] によって裏付けされる。
- (5) また、人類学者はさらに、エキゾチックな「場所」の表象を創りだすことに専ら携わってきた人類学が、各地の「場所」を創りだしてきたことについても、自省的に検討を加えてきた [Appadurai 1988; Fernandez 1988; Gupta and Ferguson 1992, etc.]。
- (6) 本調査は、2003年7月に、渡邊欣雄教授（東京都立大学）、麻国慶助教授（北京大學）、小国善弘助教授（東京都立大学）、深山直子氏（東京都立大学）と共同で行ったものである。従って、本論で使用されるデータは、5人の調査結果であることを断っておきたい。さらに、筆者自身が2001年10月から11月にかけて行った調査データも参照している。
- (7) 会誌『がっぺい』（2002年）。
- (8) 『仲里村総合計画』、『具志川村基本計画』、及び会誌『がっぺい』。
- (9) *ibid.*
- (10) ただし、当時の仲里村長は公的な立場からではなく、あくまで個人的な立場から出資したと推測される。
- (11) 史跡整備事業委員会が一連の活動を記した記録書。公的に発行されているわけで

はないので名前は伏せるが、活動の目的・経過報告・設計図などがこと細かに記されている。

- (12) 久米島では過去に島の外で生活した村民が多く、その経験から、御嶽を沖縄特有のもの、精神的な支柱であると認識するようになったと説明する者もいた。また、メディアや旅行会社が、御嶽を沖縄の代表的なイメージとして宣伝していることも要因の一つとして挙げることができる。
- (13) 大工は「フンシ」をよく知る者として久米島では一般に考えられているが、実際には大工自身、「フンシ」に関する知識が曖昧な場合もある。それゆえ、筆者が調査に訪れると、大工自身が「先輩たちの言うことをもっと聞いておけばよかった」と零すことがしばしばある。「フンシ」に基づいた建築の場合、居住者の意図と大工の行為とが異なるケースが生じているのだが、今まで風水論ではこの点は等閑視されてきた。
- (14) 字儀間の場合、観光化や史跡整備の影響が字Zほど強かったわけではない。再建の目的が観光化のためだという声は間接的に聞いたことはあるが、文書化されているわけではない。ただし、拝所再建に際して、「先輩」からの語りを重視し、その延長上で活動を捉えていた点で、共通している。

## 参考文献

- アーリー, J. 2003『場所を消費する』(吉原直樹・大澤善信監訳)法政大学出版部
- オジェ, M. 2002『同時代世界の人類学』(森山工訳)藤原書店
- 河合洋尚 2002「沖縄久米島の陽宅『風水』——具志川村の事例の予備考察」『民俗文化研究』三、pp.50-70
- 2003「人為的構築環境の社会人類学的研究——植民地期香港の都市計画と新界宗族による風水解釈の変遷過程」(修士論文:東京都立大学提出)
- 具志川村村史編纂委員会 1976『久米島具志川村史』具志川村役場
- 小牧実繁 1976「久米島民俗断片」池田弥三郎(編)『日本民俗誌体系』一〇、pp.26-30
- トゥアン, Y・F. 1992『トポフィリア』(小野有五・阿部一訳)第一書房
- 仲原善秀 1982「久米島の歴史」沖縄久米島調査員会(編)『沖縄久米島』、pp.1-68、弘文堂、
- 仲原善忠 1969『仲原善忠著作集(下)』沖縄タイムス社
- ハーヴェイ, D. 1999『ポストモダニティの条件』(吉原直樹監訳)青木書店
- フランク, A・G. 2002『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店
- 外間守善 2002「久米島の総合調査」『沖縄学への道』、pp.282-297、岩波現代文庫

- ホブズボウム、E. & レンジャー、T. 1992 『創られた伝統』 (前川啓治ほか訳) 紀伊  
国屋書店
- 宮平潔副 1967 『儀間部落誌』 福琉印刷
- リビエツツ、A. 2002 『レギュレーションの社会理論』 (若森文子訳) 青木書店
- 渡邊欣雄 1990 『民族知識論の課題 — 沖縄の知識人類学』 凱風社
- Appadurai, A. 1988 "Place and voice in anthropological theory." *Cultural Anthropology* 3 (1): 16-20
- Auge, M. 1992 *Non-Lieux: Introduction a une Anthropologie de la Surmodernite*.  
Paris: Edition du Seuil.
- Bahloul, J. 1992 *La Maison de Memoir: Ethnologie d'une Demeure Judeo-arabe en  
Algerie (1937-1961)* Paris: Editions Metaile.
- Dominy, M. 1995 "White settler assertion of native status." *American Ethnologist* 22  
(2): 358-374
- Feld, S. and Basso, K. 1996 *Senses of Place*. New Mexico: School of American  
Research Press.
- Fernandez, J. W. 1988 "Andalusia on our mind." *Cultural Anthropology* 3 (1): 21-34
- Geertz 1996 "Afterword." S. Feld. And K. Basso (eds.) *Senses of place*. New Mexico:  
School of American Research Press.
- Gupta, A and Ferguson, J. 1997 *Culture, Power, Place*. Durham and London: Duke  
University Press.
- Gray, J. 1999 "Open space and dwelling places: Being at home on hill farm in the  
Scottish border." *American Ethnologist* 26 (2): 6-23
- Hirsh, E. and O'Hanlon, M. 1995 *The Anthropology of Landscape: Perspectives on  
Place and Space*. Oxford: Oxford University Press.
- Hoffman, K. E. 2002 "Moving and dwelling: Building the Moroccan Ashelhi home-  
land." *American Ethnologist* 29 (4): 928-962
- Linnekin, J. S. 1983 "Defining tradition: Variations on the Hawaiian identity." *American Ethnologist* 10 (2): 241-252
- Low, S. M. 2001 "The edge and the center: Gated community and the discourse of  
urban fear." *American Anthropologist* 103 (1): 45-58
- McDonogh, G. 1991 "Discourse of the city: Policy and respance in the post- tradi-  
tional Barcelona." *City and Society* 5: 40-63
- Munn, N. 1996 "Excluded spaces: The figure in the Australian landscape." *Critical  
Inquiry* 22: 446-465
- Richardson, M. 1984 *Place: Experience and Symbol*. Baton Rouge.

- Rodman, M. C. 1992 "Empowering place: Multilocality and multi-vocality." *American Anthropologist* 94 (3): 640-656
- 2001 *House far from Home: British Colonial Space in the New Hebrides*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Rutheiser, C. 1997 "Making place in the nonplace urban realm: Notes on the revitalization of downtown Atlanta." *Urban Anthropology* 19: 1151-1186
- Stoller, P. 1996 "Spaces, places, and fields: The politics of West African trading in New York City's informal economy." *American Anthropologist* 98 (4): 776-788

**【現地資料（非売品）】**

- 久米島観光協会 『沖繩珠美 — 古から琉球の粹を集めてきたとされてきた、美しき島』  
(2003年度観光パンフレット)
- 具志川村役場 『具志川村基本計画』(第1次～第3次)
- 具志川村・仲里村合併協議会 『会報 がっぺい』(1998年～2002年)
- 仲里村役場 『仲里村総合計画』(第1次～第3次)

〒664-0851 兵庫県伊丹市中央 6-2-17-303